



4年ぶり水戸の夏
コロナ禍を乗り越えて——



熱気と一体感に包まれた



第63回 水戸黄門まつり

7月29日は、千波湖で水戸偕楽園花火大会、8月5日・6日は、国道50号で本祭を開催。3日間で、55万人が来場し、水戸のまちがにぎわった。



60年以上の歴史を誇る、水戸の夏の風物詩「水戸黄門まつり」。
2019年、より多くの方に楽しんでもらうため、「魅せるまつり」としてリニューアルした。
しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年と2021年は、中止を余儀なくされ、オンラインでの「Remote水戸黄門まつり」となった。2022年は、時期や会場を変更して開催した。

そして、2023年——。
4年ぶりにあの夏が帰ってきた。

7月29日、水戸偕楽園花火大会。水戸の夜空に大輪の花が咲いた。千波湖で、国内最高峰の花火が打ち上げられると、訪れた観客からは歓声と拍手が沸き起こった。

本祭1日目の8月5日は、2300人以上の参加者が趣向を凝らした衣装やダンスで競い合う「水戸黄門カーニバル」、伝統工芸品の水府提灯の伝統と革新を表現した「水戸黄門提灯行列」のほか、「山車巡行」、「神輿連合渡御」などが行われた。

2日目の8月6日は、高さ約4mのみこしを大勢の担ぎ手で担ぐ「水戸ふるさとのみこし渡御」や、こどもたちがのみこしを担ぐ「子どものみこし渡御」などを開催。最後には、山車8台が一堂に会し、迫力ある光景が繰り広げられる「大叩き合い」が行われ、まつりは幕を閉じた。

初めてまつりを体験したこどもも、この日のために何度も何度も踊りを練習してきた人、まつりの開催を心待ちにしていた人——。たくさんの人の想いがひとつになり、明るい笑顔に溢れ、水戸のまちが熱気と一体感に包まれた3日間となった。

